

アレクサンドル・バリサヴィチ・スピヴァコフスキイ
色丹島デリフィン湾におけるオホーツク文化の古墳墓

Спеваковский, Александр Борисович.

Древнее погребение охотской культуры в бухте Дельфин (о. Шикотан).

『言語センター広報 Language Studies』第5号 小樽商科大学言語センター 1997年 51~57 ページ

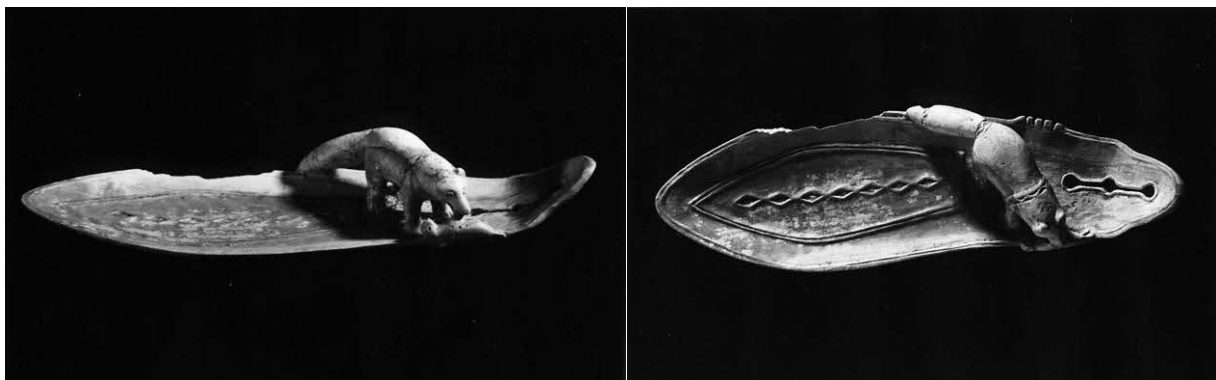
解題

1979年、ソヴィエト連邦科学アカデミー民族誌学研究所レニングラード支部（現在のロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族誌学博物館：クンストカーメラ）の調査隊が択捉島を訪れ、「岩面線刻記号」の現地調査を実施した（スピヴァコフスキイ1994）。調査を指導した Ю.В.クノラザフ（1922-1999）はマヤ文字解読の業績で知られる研究者であり、極東のこの方面に漢字以外の文字による古代碑文がある、という情報は、鳥居龍蔵が小樽市手宮洞窟の岩壁彫刻を突厥文字と紹介したこと（Torii 1919）などによって早くから流布していた。ソ連邦が占有した1945年以降、千島列島でも文字や記号を線刻したように見える岩石の発見が何度か伝えられているが、訳者の知る限り今のところ確実に人為的に彫刻された前近代の資料はなく、1979年の調査も劇的な成果を挙げることはなかった。

しかし、新大陸の文化とその起源はクンストカーメラの継続的な研究テーマであり、1982年からは古代人が千島列島を経由してアジアから北アメリカへ移住した可能性について検討を進めるため、再びクノラザフの調査隊が千島列島の先史編年体系の確立を目標とした調査を1990年まで継続した（Zaitseva et al. 1993）。調査内容は主に踏査と年代測定試料採取のための小発掘であったが、1985年には色丹島のデリフィン湾（島南西部に深く切れ込んだノトロ湾）奥で集落・墳墓遺跡が発見され、85年と87年の発掘調査により特にオホーツク文化に関する資料の収集が試みられた。この一連の調査で中心的な役割を果たしたのがクンストカーメラでエヴェンの民族誌などを研究していた著者スピヴァコフスキイ博士であり、博士はその後小樽商科大学に勤務して、アイヌ民族や日本文化の研究を進めながら同学の刊行物に千島列島での調査の成果を何度か発表されている。

そのうち1997年に公表されたこの論文は色丹島での調査の内容を要約したうえで1号墳墓の男性遺体の形質に焦点を当て、それが極東のモンゴロイドではなく、中央アジアの類型に属するとの調査結果を紹介している。これは資料の年代判定とあわせて日本の研究者にとって容易に追従しがたい主張であると思うが、縄文系の集団が久しく孤立していた日本列島に向かって大陸の諸集団が南北から移動・展開した過程としてオホーツク文化の形成を今日の日本人の起源と並置し、アイヌの由来と対比しながら論じる視点は、ソ連邦及びロシアの民族誌研究の関心の所在をよく示したものである。また、著者らの調査は今のところ他にほとんど報告例のない南千島におけるオホーツク文化の埋葬の事例を記録して貴重であり、この論文に収録された1号墳墓遺体の出土状況図には、甕被り葬の土器の中の空間に遺体の顔面が露呈していたことを示す下顎のずり落ちが示されている。

この遺跡の出土品のうち北海道の考古学者にとって興味深いのは、オホーツク文化の新しい時期のものと思われる「水の中からアザラシの仔を引き出そうとしているキツネの像を表したスプーン」（図i）であろう。その長軸上にある菱形を連ねた装飾、前脚の後ろに帯状の装飾を有するキツネの像、三角形の彫去をずらしながら対向させ間にジグザグの線を形成する



図i デリフィン湾の遺跡から出土した「スプーン」（長さ15.5cm）

手法、といった要素は道東の遺跡の骨製品にも見られるが、この種の立体的な彫像を伴う篋状製品自体は網走市最寄貝塚出土の断片（図 ii）などを除くと択捉島植貝塚（択捉郡留別村の太平洋側、単冠湾西端）での採集品（谷 19331 の図版第 8、犀川会編 1933 の図版 43 の 1・2）ぐらいしか直接の類例が知られていない。マッコウジラの歯を素材としたこの択捉島の類例（長さ 15.7cm）には屠られたクマと思われる動物像と蹲踞した人物像が並んで彫られており、よく知られた様式的な女性像（前田 2002 など）を除いて人物表現のほとんど見られないオホーツク文化の造形の中で特異な位置を占めているが、惜しくも 1934 年の函館大火で焼失したようである。現在 Санкт-Петербург のクンストカメラに所蔵される「スプーン」は、こうしたオホーツク文化のいまだよく知られない側面を示唆する遺物と言ってよいであろう。



図 ii 最寄貝塚出土の篋状製品
網走立郷土博物館蔵 佐藤雅彦氏撮影

翻訳にあたって、術語に次のような訳語を当てた。これは別ファイルで公開する 1994 年の論文の翻訳と共通する。

группа：集団 захоронение：埋葬 община：組織
 общинник：成員 общность：共同体 погребение：墳墓
 род：氏族 серия：資料体 субстрат：伏在要素 этнос：民族 этнические процессы：諸民族の動向

スピヴァコフスキー博士には翻訳と発表の許可をいただいたうえ訳者からの度重なる質問にお答えいただき、さらに最近公表された著作（Спеваковский 2017）から「スプーン」写真の転載を御承認いただいたことを深く感謝申し上げます。論文の挿図は B5 判の原本を A4 判に組み直すにあたり約 1.15 倍に拡大した。小樽商科大学言語センターからは刊行物の記事転載を御了解いただき、道立図書館には原本挿図の複写について協力いただいた。また天野哲也氏と杉浦重信氏には解題の作成に伴い様々なご教示をいただいた。いずれも記して感謝申し上げます。（西脇対名夫）

犀川会編 1933 『北海道原始文化聚英』民族工芸研究会

A.B.スピヴァコフスキー（下村五三夫訳）1994 「アイヌ民族による択捉島の岩面線刻記号について」『言語センター広報 Language Studies』第 2 号 小樽商科大学言語センター 117-121 ページ

谷 敬一 1931 「択捉島東海岸発見の骨牙器」『史前学雑誌』第 3 巻第 4 号 173-183 ページ及び図版第 8

前田 潮 2002 『オホーツクの考古学』同成社

Torii, R., 1919. Etudes Archéologiques et Ethnologiques: les Aïnou des Iles Kouriles. 『東京帝国大学紀要』理科第 42 号

Zaitseva, G.I., Popov, S.G., Krylov, A.P., Knorozov, Yu.V. and Spevakovskiy, A.B., 1993. Radiocarbon Chronology of Archaeological Sites of the Kurile Islands. Radiocarbon, Vol. 35, No. 3. pp. 507-510.

Спеваковский, А.Б., 2017. Исследование памятника охотской культуры на острове Шикотан и проблемы этнической истории айнов и охотцев. Тот же (ред.). Айнская проблема (вопросы этногенеза и этнической истории айнов). Музей антропологии и этнографии им. Петра Великого (Кунсткамера) РАН: СПб, Владивосток: изд-во Рубеж, сс. 195-214.

序

アイヌは極東の島嶼域の原住民であり、比較的孤立したまま数千年の期間にわたって存続してきた。しかし西暦紀元の頃を境に、その生活に本質的な変化が生じた。つまり島々に向かって南北から、アイヌとは異なる大陸由来の民族の大集団が数度の波となって押し寄せたのである。この移住は恐らく、アジア内陸の諸地域における複雑な人口動態と諸民族の動向によって引き起こされたものである。南からは、朝鮮半島を経由して現在の日本人の祖先が列島に侵入した。弥生文化を築いた彼らは、次第にそれまでの日本列島の原住民を北へと追い立て始めた。これに対して、サハリン島を経由して日本に到来した住民はその数が少なかったため、アイヌの祖先に対して目立った影響を与えなかった。しかしながら、移住者たちは極東の島嶼域にいわゆるオホーツク文化をもたらし、それは前 1 千年紀の終わりから後 2 千年紀の初めまで 1000 年以上も存続した。

オホーツク文化はサハリン南部、千島列島の南部及び北海道の北部に分布した。オホーツク文化の最も初期の遺跡（例え

ば鈴谷貝塚)は西暦紀元直前の数世紀の年代が与えられており(ヴァシーリイフスキイ・ゴールビフ 1976 参照)、この文化が西から東と南へ向かって拡散したことを示している。この文化の後期の遺跡は概ね 12 から 13 世紀のものである(エイケンス・樋口 1982、シンポジウム オホーツク文化 1982)。

オホーツク文化研究における最大の関心事はその住民の問題である。古人骨研究上の知見に照らして、この文化の担い手はその歴史のどの時点をとっても民族学的にも人類学的にも単一の民族ではなく、大陸のモンゴロイドの様々な集団への近似を示す。したがって、オホーツク文化の基本的な問題は、どのような人々がいつ、その住民の基盤を形成したかという点に帰結する。しかしこの文化の地域的なヴァリエーションの研究の進展の度合いが今日なお不揃いであるため、オホーツク人の民族学・人類学的帰属を解決することは非常に面倒な作業となる。古人骨・古民族誌学的研究のための資料の大部分は北海道島の遺跡の発掘によって得られており、ここでは隣接地域に比べて考古学的調査がよほど進んでいる。千島列島ではオホーツク文化の遺跡は多くが未調査、または調査不十分の状態である。

1 オホーツク人の民族学・人類学的帰属に関する知見に照らした極東地域北部の民族史の概観

日本列島の新石器時代を特徴づけるものは古アイヌによる縄文文化の繁栄である。この時期、大陸の沿海部に居住していたのは恐らく定住的な古アジア族の住民で、彼らはチュクチ・カムチャツカ系及びエスキモー・アレウト系の言語を持っていたと考えられる。このことを裏付けるのは極東のツングース・満州系先住民族の諸言語の中に保存された古アジア系の伏在要素である(ブルイキン 1984・1987)。また一部の研究者はアムール川下流域とサハリンの地名の中にニヴフ語以前の要素が伏在することを認めている(クレイノーヴィチ 1973 の 48-49 ページ、『極東の所民族』1985 の 50 ページ)。この事実から、現在の北東アジア辺境部(チュコト半島およびカムチャツカ)及びアリューシャン諸島の住民、つまりチュクチ・カムチャツカ系及びエスキモー・アレウト系言語の話者たちはかつて現在の居住地よりはるかに南方の、アイヌの祖先たちの占有する領域に接して住んでいたと考えることができる。

すでに触れたように、極東の歴史の中で新石器及びそれに続く時代に一連の大きな移住を引き起こしたものはアジア内陸の諸地域の民族の動向であった。この動向に関連したのは何よりも北部モンゴロイドの諸共同体、つまりツングース系の言語を持つ狩猟民であった。古ツングース・満州系諸族の極東縁辺域への拡張は大規模なものであり、広大な領域にわたって多くの古代民族に影響を与えた。民族誌学上、ツングース語族の話者がアムール流域に登場したのは後期新石器のこととされている(ヴァシリェヴィチ 1969 の 258 ページ)。この諸民族の動向は膨大な数の人間を絶えず移動させ、様々な民族性をもつ人々を混淆させた。太平洋沿岸に達すると、遊動してきた狩猟民は沿海部に原住する定住者たちを多数の集団に分裂させ、また彼らを排除または同化していった。どうやら、まさにこの古代の狩猟民の極東への侵入とその後の沿岸への到達こそがチュクチ・カムチャツカ系及びエスキモー・アレウト系言語の話者を北方の極地へと移住させたものようである。

このツングース・満州系の人々の到来の結果極東で形成されたのが、中国の史書「後漢書」に記録される肅慎及び挹婁の共同体であった可能性がある。

ツングース語族の話者による極東地方の原住民の排除と同化の過程は実質 2 千年間にわたって進行した。そのうち最後の移住の結果としてサハリンには数世紀前にエヴェンキとオラク(ウイルト)が登場した。トナカイ飼養を行うエヴェンキに関して言えば、彼らの北東方への進出はようやく 19 世紀の中頃に生じたもので、いくつかのエヴェンキの民族がコリヤーク及びイテリメン民族の領域を通してカムチャツカ中央の諸地方へ進出したのである。

恐らく、西暦紀元の頃とそれに続く時期に、同様の諸民族の動向が極東の島嶼地域を見舞ったのであろう。古代の古アジア系の原住者たちの一部が島々へと放逐され、またツングース・満州系の住民自身、そしてその移住者の後裔を中心とした、異なる民族性と形質人類学的なタイプの混じった人々もまた島嶼へと侵入した可能性がある。まさにこうした来住者がアイヌの祖先たちと民族的な接触をもつようになって現れたのが、学術上オホーツクと呼ばれている文化の担い手たちである。

大陸からの移住者の第一波の一つは、恐らくチュクチ・カムチャツカ系及びエスキモー・アレウト系の人々であったろう。この仮説はもちろん、古人骨学その他のデータが欠如しているため仮説でしかない。しかしこの古アジア族とアイヌの祖先との接触の結果と思われる言語上の近似がいくらか示されている(ヴォヴィンの 48-49 ページ参照)。

さらに新しい時代になるとツングース・満州系の諸集団が島嶼に侵入した。北海道の大岬遺跡出土のオホーツク文化に属する頭骨資料の研究によってこの想定は立証されている。日本とロシアの形質人類学者の研究は概ね互いに同様の結論に達しており、複数の指標に関してオホーツク人が極東のツングース・満州系の諸共同体に近いことを示している(山口 1975、石田 1988、コズィンツェフ 1990 を参照)。

しかし、この論文で注意を向けたいのはチュクチ・カムチャツカ系、エスキモー・アレウト系でもツングース・満州系で

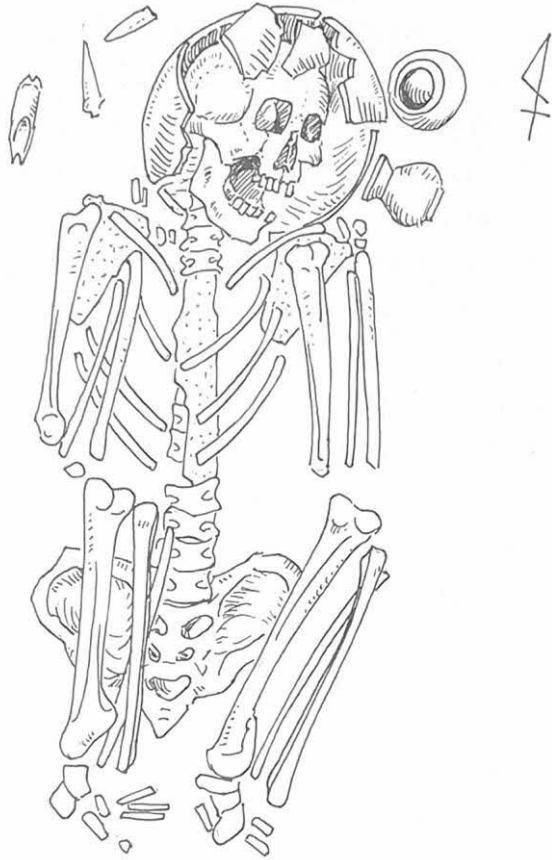


図1 貝塚の中の男性の埋葬（チリフィン湾）

頭蓋も含め外部環境と人為の影響をほとんど受けていなかった。

骨格は中背の男性のもので40歳前後、頭を北に向けていた（図1参照）。骨の位置は浅く地表から約40cmのところであり、墓穴の痕跡はなく貝層の中に解剖学的な序列を保っていた。被葬者はあおむけに横たわり脚を胸郭の方に引き寄せ、肘を折り曲げていた。こうした姿勢は縄文の墳墓の多くに特徴的なものであった。骨の上から大きな、やや長手で丸みのある形の径30-45cmほどの平石がいくつか被せられていた。この石は被葬者の胸郭のあたりに集中していた。副葬品としては土器が3点あり、うち2点は小さく他の1点は大型の土器である。大きい土器は頭を覆うのに用いられていた。このように土器で頭を覆う例は北海道のアイヌの墳墓で記録されている。この大きい土器と、小型土器のうちの1点は細い貼付けの手法で装飾されている。日本の文献ではこうした土器は「ソーメン文」、つまり細い麺類のような装飾（「細麺文」）という用語で記述されている。遺骸のすぐ側には骨製の鎌が2点と回転式の銚頭があり、また骨製のスコップ状の道具がいくつか見られた。

男性の骨格はソ連邦科学アカデミー考古学研究所レニングラード支部（現在のロシア科学アカデミー物質文化史研究所）の研究室で測定の結果前1千年紀の末、つまり2,280±20年前のものとした（測定施設（略号Jle）番号は4029B）²⁾。しかしこの年代は、概ね紀元後1千年紀の中頃とされる「ソーメン文」式の土器の年代とは矛盾している。骨格資料を再度分析するか、あるいは千島列島南部の土器伝統について、この地域で「ソーメン文」に類する装飾のある土器が北海道より早く出現したということはないのか、より綿密に研究することが必要である。

被葬者の頭蓋は顔面を上に向けていた。頭蓋は死後の変形をこうむっていたが意図的なものではない。左の頭頂骨と左頬骨は破損しており、鼻骨は欠如していた。しかし復元作業の結果欠損は補われ、頭骨はその形態研究に十分堪える状態となった（図2-4を参照）。

色丹島の墳墓出土の頭骨を調査した結果、頭骨の形態学的指標の多くに関してチリフィン湾の住民は古代のアイヌとは異なっていることが示された。にもかかわらず、歯列の特徴に関しては色丹島の資料は北方モンゴロイドの諸標本より縄文のそれに近似している³⁾。

もないもう一つの住民の集団であり、それはオホーツク文化の担い手を構成した古代諸民族の範囲を広げる意味を持っている。

2 貝塚の中の古墳墓とチリフィン湾の住民の形質人類学的類型

1985年、色丹島南西部のチリフィン湾で、ソ連邦科学アカデミー民族誌学研究所レニングラード支部（現在のロシア科学アカデミー人類学民族誌学博物館）の研究者によってオホーツク文化の遺跡が発見された。この遺跡は住居と貝塚の複合したものであった。発掘調査に際して貝塚の層と住居の中から海獣狩猟（回転式銚頭）、狩猟（骨製・石製の鎌）及び漁撈（漁網用の石錘）の用具、骨製の鎌と土掘り具、文様のある装飾品及び骨製の生活用具、金属のナイフ、儀礼用具（巧みに骨を彫刻して水の中からアザラシの仔を引き出そうとしているキツネの像を表したスプーンを含む）が数多く発見された。またオホーツク文化に属する土器片が多量に発掘され、縄文土器の破片もいくらか出土した。貝塚からは海獣（クジラと鯨脚類）、クマ、キツネ及びイヌの頭蓋やその他の骨が見いだされ、また魚骨と鳥骨、各種の二枚貝の貝殻とウニの殻が出土した。

貝層に覆われた遺跡の調査の結果、さらに複数の埋葬が発見され、そこから6個の頭蓋からなる資料体が得られた¹⁾。

最も興味を引くのは貝塚の西縁で発掘された墳墓である。遺跡内で発見された他の遺骨とは異なり、この墳墓の骨格は

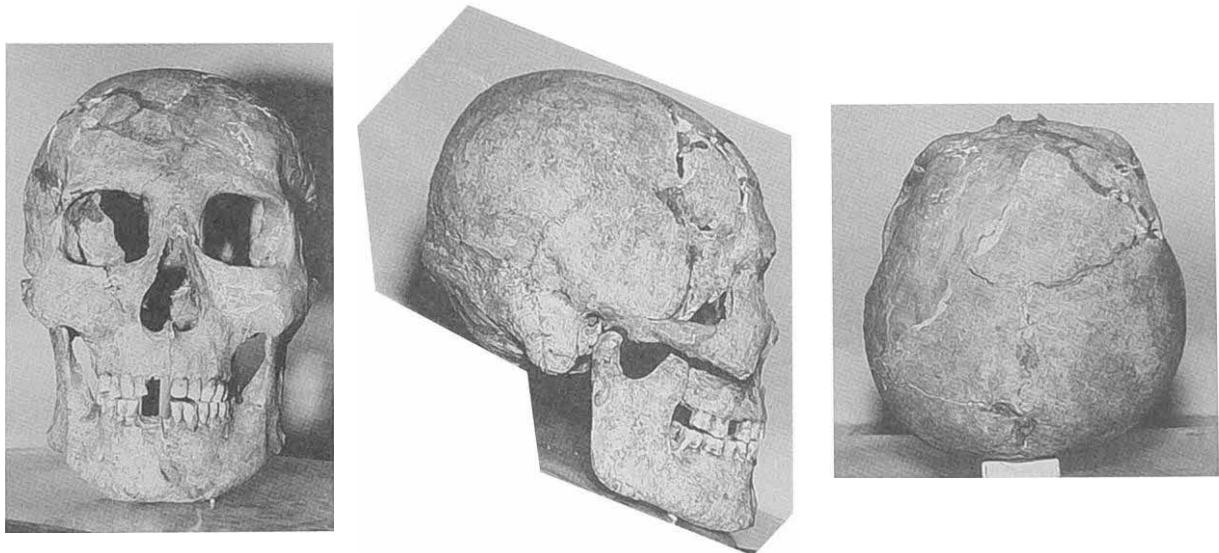


図2 (左) 貝塚の中の埋葬の頭骨 (前面) И.И.ホフマン撮影。 図3 (中央) 同前 (側面) 図4 (右) 同前 (上面)

ロシア科学アカデミー人類学民族誌学博物館の人類学部門で行われた調査の結論として、色丹島の頭骨は形質人類学的に中央アジアの類型に属する頭骨資料に比較するべきものである。

最後に注意しておきたいのは、実質的に単一の出土資料に基づいて種族上の帰属について結論することは当然ながら非常に困難だということである。複数の頭骨から成る資料体を研究することが不可欠である。色丹島南西部での古人類学的調査をさらに深め、綿密な研究を進めることによってそのような資料体が得られることであろう。

結論

ゼリフィン湾における古民族誌学・古人類学的調査の結果、次のような結論が導かれる。

1) オホーツク人の文化を統合していた基盤は、島々で生じた移住と接触の結果として彼らを取り入れた古アイヌ系住民の民族的伝統であった。社会経済的発展の水準が同様であったため渡来者たちが文化的に同化することに障害はなかった。オホーツク人たちはアイヌの祖先たちから、恐らく生業に関する技術、海獣狩猟のための用具、土器製作（土器にはオホーツク人特有の要素を加えているが）、墳墓の様式（貝塚の中に屈葬し頭に土器を被せること）、装飾品、骨の彫刻技術などを取り入れたのであろう。

2) オホーツク文化の担い手は民族的・種族的に単純な構成のものではなかった。例えば、言うまでもないことだが、前1千年紀末の鈴谷貝塚（サハリン）のオホーツク人やゼリフィン湾（色丹島）の古代の海獣狩猟者たちを後1千年紀末の大岬遺跡（北海道）のオホーツク文化の住民と同一視することはできない。年代の差によりまた場所の違いによってそれぞれ民族性を持つ複数の集団が住み分けており、それを現在仮に共通の名称で一括りにしてはいるが、人類学的特徴は一様でなかったのである。大岬にはアムール流域の（ツングース・満州系の）要素が卓越する住民が住んでおり、ゼリフィン湾では頭骨形態の特徴に関して人類学上の中央アジア的な類型に近い海獣狩猟者が住んでいた。こうしたことは、諸民族の動向の結果として東アジアの大陸諸地域から島々に向かって何度も古代住民の諸集団が押し出されたとすれば説明のつく内容である。

3) 古代アイヌが数の上で来住者たちを上回っていたために、後者は移住先の条件に順応し、生業の特色と文化要素を借用した。移住者たちを待っていた運命は常に一様で、人数の少ない民族集団は次第に周囲に同化し文化的にも変容して行った。最終的にはオホーツク人はアイヌの大集団の中に跡形もなく溶け込み、固有の共同体あるいは共同体群としては終焉を迎え、あとに彼らの子孫と考えられるような住民は残らなかったのである。

注

1) ゼリフィン湾における調査結果の一部は本論文の著者によってすでに1994年に公表されている（スピヴァコフスキイ1994、スペヴァコフスキイ1994を参照）。

2) ゼリフィン湾の遺跡の年代測定に関するより詳細な情報は Г.И.ザイツェヴァらの発表したものに含まれている (ザイツェヴァ 1993 を参照)。

3) アリゾナ州立大学 (アメリカ合衆国) 教授 K.F.ターナーの談話による。

ロシア語文献

1) ブレイキン A.A.。ツングース・満州諸語の語彙に見られる最古の伏在要素と外来要素。言語学的再構成と東洋の原始古代史。第 1 部、会議の要旨と報告。モスクワ、1984 年。

2) ブレイキン A.A.。オホーツク海沿岸の言語の語彙に見られるエスキモー・アレウト系伏在要素。ソ連邦東洋学研究所の大学院生と若手研究者による学術会議。報告要旨。モスクワ、1987 年。

3) ヴァシリエヴィチ Г.М.。エヴェンキ 歴史・民族誌的概観 (18 世紀から 20 世紀初頭)。レニングラード、1969 年。

4) ヴァシーリイフスキイ P.C.、ゴールピフ B.A.。サハリンの古代集落 (鈴谷遺跡)。ノヴォシビルスク、1976 年。

5) ヴォヴィン A.B.。アルタイ祖語音韻の再建の試み。アイヌ問題 (印刷中)。

6) クレイノーヴィチ E.A.。ニヴフ サハリンとアムールの謎の住民。モスクワ、1973 年。

7) 17-20 世紀のソ連邦極東の諸民族。モスクワ、1985 年。

8) スビヴァコーフスキイ A.B.。色丹島のオホーツク文化の貝塚 (千島列島の民族史上の諸問題によせて)。小樽商科大学人文研究、第 87 輯。1994 年。

日本語文献

1) シンボジウム オホーツク文化の諸問題。東京、1982 年。

2) A.スベヴァコフスキー。色丹島のオホーツク文化遺跡及びアイヌ民族とオホーツク人の民族の歴史に関する諸問題。Language Studies、第 2 号。小樽商科大学言語センター、1994 年。

英語文献

1) Aikens, C. Melvin, Higuchi, Takayasu. Prehistory of Japan, New York, London, Toronto, Sydney, San Francisco, 1982.

2) Ishida, H. Morphological Studies of Okhotsk Crania from Oshima, Hokkaido. Journal of the Anthropological Society of Nippon, vol. 91, No. 1, 1988.

3) Kozintsev, A. Ainu, Japanese, their Ancestors and Neighbours: Cranioscopic Data. Journal of the Anthropological Society of Nippon, vol. 98, No. 3, 1990.

4) Yamaguchi B. Cranial Features of the Okhotsk Culture People. Sea Mammal; Hunters: Origin of the Okhotsk Culture. Dorumen, No.6, 1975. [山口敏。オホーツク人の顔つき。加藤晋平、大塚和義、桜井清彦、山口敏。海獣狩猟民：オホーツク文化の源流。季刊どるめん、第 6 号、JICC 出版局。]

5) Zaitseva, G.I., Popov, S.G., Krylov, Yu.V., Spevakovskiy, A.B. Radiocarbon Chronology of Archaeological Sites of the Kurile Islands. Radiocarbon, vol. 35, No. 3, 1993.